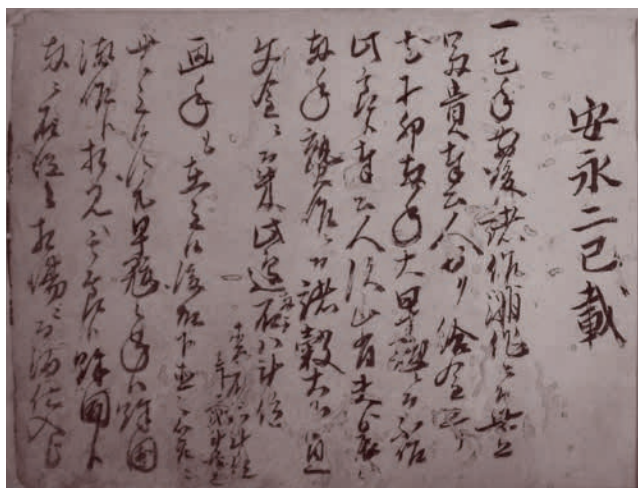


地域経済の要としての江戸時代の豪農

常陸大宮市域には、戦国時代の土豪の由緒を誇り、江戸時代を通じて、地域社会の中で有力な地位を保った豪農がたくさん存在しました。そうした豪農は、地主・村役人・山横目・地方文人など多様な立場・性格を合わせもち、地元の産物を集荷・販売する商人・問屋としても活躍しました。野口村の関沢家は、その代表といえます。

戦国時代末まで下野国の宇都宮氏に仕えていた関沢家は、慶長6年(1601)に野口村に移り住みます。その後、18世紀前期に紙・煙草・漆を商い、18世紀半ばには酒と醤油の醸造を始めます。9代目当主の政英は、18世紀後期に経営を拡大し、「重宝記」という記録を残しました。そこには、米・大麦・小麦・大豆・小豆・紙・楮・漆・蒟蒻・紅花・木附子・綿・酒・水油・塩など、関沢家を取り扱った商品の相場と同家の諸対応が、連年、克明に記されています。

関沢家は、主力商品の紙・楮・漆を主に江戸商人に販売し、煙草は江戸はもとより大坂にまで出荷していました。米は、江戸に売る一方で、下野や岩城、時には尾張・遠江の商人から仕入れることもありました。政英は、遠隔地の市況情報を素早く入手し、目まぐるしい価格変動を正確に把握し、地域的・時間的な価格差を生かして、仕入と販売の有利な時期・相手を見極めようとしていたのです。



▲安永2年(1773)から書き継がれた「重宝記」
(関沢賢家文書117、茨城県立歴史館寄託)



近世史部会専門調査員 平野 哲也 氏
(常磐大学人間科学部 教授)

市域の特産物(紙・楮・漆・煙草・蒟蒻)に焦点を当てれば、その生産・販売が、関沢家を介して遠隔地の市場と結びつき、大きな影響を受けていたことがわかります。関沢家の背後には、特産物＝商品を栽培・加工する多数の小百姓がいました。関沢家の商業経営が小百姓の生業を成り立たせ、同時に小百姓の生産活動が関沢家の経営基盤となる相互関係が浮かび上がってきます。

私は、関沢家のような旧家の古文書を通して、豪農の政治的・経済的・社会的・文化的役割を明らかにするとともに、周囲の小百姓の生業・暮らしや地域経済のあり方を探っていきたいと考えています。古文書に書かれた内容を深く具体的に理解するためには、市民の皆さんのお話や情報提供が欠かせません。ご協力とご支援をよろしくお願いいたします。



▲関沢家が佐伯神社に奉納した歌碑(明治28年[1895]9月建立)

歌碑の下部に「那珂郡野口村 村長士族 芳賀一族 關澤長次郎 清原高治」の陰刻がある。関沢家が宇都宮氏の重臣芳賀氏(本姓は清原氏)の末裔という家意識を明治時代にも堅持していたことがわかる。

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111(内線344)